

不確定性の宇宙におけるテクノロジーと知識

フランコ・ベラルディ（ビフォ）

北川眞也 + 櫻田和也訳

資本からの自律・独立を目指した1970年代のイタリア・アウトノミア運動のなかでも、とくに革新的な思想と活動で知られた、ビフォことフランコ・ベラルディ。メディア・アクティビストのビフォが、1998年に執筆したこの論考では、現代資本主義のなかでますます鍵となるテクノロジーと知識の関係性が紐解かれます。マルクスの「機械についての断章」を皮切りとして、アウトノミアの思想家であり、新たな公共圏の創出につながる知性の運動を論じるパオロ・ヴィルノに加え、仮想世界のコミュニケーションのありようを批判的に検討するアーサー・クローカー、知識という生産物の所有不可能性を示唆するマネジメントのグルことピーター・ドラッカーらの議論を取り上げていきます。人間の解放を実現するとも期待されたインターネットは、「情報」の循環を著しく加速させはしましたが、遅延をもたらすという理由で、人間の存在や社会関係に不可欠な「意味」の領域を破壊的なまでに削り取ってきました。ビフォは、90年代にみられた多大な期待に反して、テクノロジーが人間の知性と精神を虚脱させている現状に深い失望を吐露し、辱められた身体の反動として懐古型ファシズムが台頭していることを指摘します。資本主義と結合する限り、テクノロジーは、人間の知性・精神を労働力として包摂し、搾取の道具として機能するのです。著者は、こうした状況がもたらす人間の主観性や集団的無意識への影響を加味し、テクノロジーが解放の可能性を取り戻す方策について問いかけていきます。

- 1 レーニン主義では大都市は説明不可能
- 2 テクノロジーと一次元的思考
- 3 〈労働〉、〈行動〉、思考——エクソダスとネットワーク
インフォ・プロダクション
- 4 認知労働と情報生産

Source: Franco "Bifo" Berardi (1998). *La nefasta utopia di Potere Operaio: lavoro tecnica movimento nel laboratorio politico del Sessantotto italiano*. Rome: Castelvechi.

The text is translated to Japanese upon permission of the author on the occasion of the online colloquia *Art As Technology: Accelerating the East* on September 21, 2021.

ISSN: 978-4-909481-10-0

Art As Technology:
Accelerating the Eastテクノロジーとしてのアート：
加速する東洋 # 1Franco "Bifo" Berardi
フランコ（ビフォ）ベラルディHelen Hester
ヘレン・ヘスターBogna Konior
ボグナ・コニオルMcKenzie Wark
マッケンジー・ウォークSebastian Breu / Ruri Kawanami
セバスチャン・ブロイ / 河南瑠莉Nikolay Smirnov / Royce Ng
ニコライ・スミノフ / ロイス・アン

この論考の動画はこちら：<https://0-ea.art/journeys/DiQKY/2Co.html?c=2&t=0>

watch video

不確定性の宇宙におけるテクノロジーと知識¹

フランコ・ベラルディ（ビフォ）

北川眞也 + 櫻田和也訳

1 レーニン主義では大都市は説明不可能

1970年のある夜、ハンス＝ユルゲン・クラール²が死亡した。交通事故である。まだ20代であった。けれども、すでにクラールはドイツの反権威主義運動でもっとも有力な思想家のひとりだった。この運動が街頭で爆発的な拡大をみせたのは、イランの国王^{シャヘ}に抗議する反帝国主義デモのさなかに、ベンノ・オーネゾルクという26歳の学生が警官に射殺されたときだった。1967年のことである。運動は急速に学生のあいだに広がり、ドイツ社会の民主主義^{デモクラティゼーション}を深化させる闘いが行なわれた。学生たちは、ベトナム反戦運動に取り組み、その一方で、シュプリンガー社グループがつくりだすメディア中毒を、ときにセンセーショナルな行動を通して糾弾した。

ドイツの運動——当時、社会主義ドイツ学生同盟（SDS）内でもっとも組織化が行なわれていた——は当初から、両極端な2つの理論のあいだで引き裂かれていた。ひとつは中央集権的な組織を支持し、もうひとつは、「自然発生的」行動を推奨していた。前者は、マルクス・レーニン主義路線の革命細胞（Rote Zellen: Revolutionäre Zellen）の創設へとつながり、後者は、若者センター（Jugendzentren）からアウトノメ運動（Autonomen）〔自律的運動〕まで、若者運動の多種多様な経験に力を与えた。クラールは、死の2年前に、ポスト・レーニン主義の立場に立つ革命理論の基礎を練り上げようとしていた。『構成と階級闘争³』と題されたクラールの論集に収められた序文で、その編者たちは当時の状況をこう述べている。

1 【日本語・訳注】本翻訳は、Franco Bifo Berardi, *La nefasta utopia del Potere Operaio* (Roma: Castelveccchi, 1998) 所収の原文（イタリア語）ではなく、著者の指示にしたがいジュゼッピーナ・メッキア（Giuseppina Mecchia）による英語翻訳版からの訳出である。Franco Berardi (Bifo), "Technology and Knowledge in a Universe of Indetermination", in *SubStance*, 112, 36-1, 2007. pp. 57-74.

2 【日本語・訳注】ハンス＝ユルゲン・クラール（Hans-Jürgen Krahl）1943年生まれ、1970年没。ドイツの哲学者、社会主義ドイツ学生同盟（SDS）の活動家。ヨーロッパの「1968年」を代表する思想家のひとり。発展した資本主義において、技術的－科学的知性が生産に持つ重要性を説いた。

3 【英語版・注】フランコ・ベラルディ（ビフォ）は、この著書（*Konstitution und Klassenkampf*. Frankfurt: Neue Kritik, 1971）に所収された一章 *Produktion und Klassenkampf*（生産と階級闘争）のイタリア語翻訳から引用している。この著作は英語には翻訳されていないため、イタリア語版のみが、本論文の英語翻訳者が唯一参考にできたものだ。この章の一部については、ドイツ語オリジナル版が以下のサイトで読める。www.krahlstudien.de/texte.produnklass.html 英語翻訳者は、ビフォが引用しているくぐりを見つめることができなかった（英語翻訳者メモ）。

クラールの提出した理論的問題が体系にまで仕上げられなかったのは、かれの死がすべてではない。むしろ、かれの研究が未完であるのは、労働運動にかんする従来の理論が実践との矛盾をきたしていたというのに、後期資本主義の大都市で展開される革命運動には十分に精緻化された理論が欠落していたという政治的状況の直接の現れなのである。⁴

クラールは、密度の濃い哲学的断章を集めたこの著作で、フランクフルト学派、とくにアドルノの思想を皮切りとし、知的化された (intellectualized) 労働の新たな社会的構成を、従来の労働運動の政治や組織化のカテゴリーに押し込めるかどうかを問い、この批評を、疎外された労働と反権威主義闘争の実践のただなかにしっかりと定着させるのだった。

旧来的な階級意識の理論、とくにレーニンに派生するものは、階級意識をその経済的諸要素から引き離す傾向にある。この理論は、富と文明の創出における生産的主体性が担うメタ経済的、構成的な役割を見落としている。⁵

経済学の圏域と意識の圏域を分析上区分することは、生産的労働が知的労働と構造的に分離されているときには有効ではあったものの、知的労働が生産過程一般の構成要素となるときには、その意味を失っていくことになる。それゆえに、「生産を経済的諸要素へと還元しようとするのは、資本制的生産様式にみられるよくない特性なのである」。生産を需給法則によって規定された、純粋な経済的プロセスとしてのみみなすことはできない。その他の、経済外のファクターが生産に寄与しており、生産サイクルの知的化が進行するにつれて、それはさらに決定的なものとなる。社会文化、互いに大きく異なるイマジネーション、期待と失望、憎しみと孤独。こうした要素のいっさいが、生産過程のリズムと流動性に作用する。これは感情・イデオロギー・言語の圏域が、社会の生産性に影響をおよぼすということであり、感情的、言語的、クリエイティブなエネルギーが、価値生産にますます関与するようになる事態なのだ。

ハンス＝ユルゲン・クラールは、概念レヴェルにおいて、こうした事態の展開、そして、工業型モデルが時代遅れになる、この数十年にみられた生産の革新的変化の中身を先取りすることができた。クラールの考察がたどった横糸は、完全に批判的マルクス主義の抽象的カテゴリーのうちに収められてもいた。

労働時間は、もはや質的な生産の拡張を含まないときですら、価値の尺度のままとどまる。科学とテクノロジーは、労働能力の最大化を可能とする。機械が資本主義的發展を遂げる過程でしだいに主要な生産力となりゆく、社会的結合 (social combination) へと労働能力を変容させることで。⁶

クラールは、「科学的知識とプロレタリア階級意識の一般的関係にかんするテーゼ」——1969年に『社会主義通信 - 情報 (Sozialistische Korrespondenz-Info)』誌上に公表された——で、運動

4 【英語版・注】 Claussen, Loewy, Negt, Riedemann, Introduction to: Hans Jürgen Krahl, *Costituzione e Lotta di Classe* (Milan: Jaca Books, 1978) 15.

5 【英語版・注】 Hans Jürgen Krahl, *Costituzione e lotta di classe* (357).

6 【英語版・注】 Hans Jürgen Krahl, *Costituzione e lotta di classe* (357).

の政治的問題系において軸となる論点について考察している。この核心的な論点とは、科学と労働過程の関係を具現する形態として理解されたテクノロジーにほかならない。

固定資本を構成する機械体系に科学を技術的に^{テクノロジカル}移し替える動き——19世紀の末以来、組織立った仕方で行われている——、また、そのオートメーション化へと向かう傾向が、カール・マルクスによって労働の資本のもとへの実質的包摂と呼ばれたものを変化させている。実質的包摂は、たんなる形式的なそれとは異なる。というのは、直接的労働過程の技術的な構造でさえも質的に改めるものだからだ。これが生じるのは、社会的生産力の体系的応用、ならびに労働と科学との分離を通じてである。そのとき、人間と自然の有機的交換として理解された労働過程は、それ自体が社会化されることになる。資本による労働の実質的包摂のもっとも注目すべき特徴のひとつは、マルクスが述べたように、「社会的発展の一般的な所産である科学の直接的生産過程への意識的応用」⁷なのである。

社会的結合にともない、生産はますます科学的なものへと生成し、それゆえに、生産は「全体性」として、「全体化された」労働者として構成される。しかし、個々の労働者の労働能力については、単純な契機へと縮減される。〔……〕

生産過程への科学とテクノロジーの応用がこのような発展の水準へと達しているがゆえに、それはシステムを破裂させる恐れがある。こうした応用によって引き起こされている生産の技術的科学化によって生産的労働は新たな社会化を遂げ、もはや資本の強い労働の対象化に耐えるものではなくなったのである。

この若い理論家が、このような分析的検討によって、ある決定的な問いを提起するに至ったのは必然である。1960年代の反権威主義グループがぐらつかせはしたが、袂を分かつまでには至らなかった20世紀の労働運動の組織化様式や政治的プロジェクトに根底から異議を申し立てたのだ。

階級意識を非経験的カテゴリーとして理論的に構築する作業が欠けていたがゆえに、社会主義運動の内部では、階級意識の概念を大都市には不適当なレーニン主義的意味に還元してしまったのだ。⁹

レーニン主義は、組織化のモデルとして、また社会的意識と労働過程の全体性の関係を理解する方法として、大都市という状況を扱うには不十分なのである。レーニン主義は、労働過程と知識(意識)の高次の活動のあいだの分離の上に築かれている。この分離はプロト工業的労働形態を基盤としており、労働者が社会を構造化する知識の体系をまったく意識せずともおのれの仕事につい

7 【日本語・訳注】カール・マルクス（岡崎次郎訳）『直接的生産過程の諸結果』大月書店、1970年、87頁。日本語版のこの箇所には、引用部分の「意識的」の文言はない（その手前の文章にはある）。

8 【英語版・注】Hans Jürgen Krahl, “Thesen zum allgemeinem Verhältnis von wissenschaftlicher Intelligenz und proletarischem Klassenbewusstsein”, in: *Konstitution und Klassenkampf* (Frankfurt: Neue Kritik, 1971), pp. 330-347. 英語翻訳者は、ピフォ自身によるイタリア語への翻訳をベースにしているが、こうした引用文のすべては、以下のウェブサイト⁹に現在掲載されているドイツ語原文に照らして、少し修正している。www.krahlstudien.de/texte/intellprol.html（英語翻訳者メモ）

9 【英語版・注】Hans Jürgen Krahl, “Thesen...” (367).

てはよくわかっている限りにおいては有効であった。けれども、この区別の基礎は、大衆労働者なるものが社会に姿を現すときには脆弱となる。なぜなら、大衆労働者は反復性と断片化を強める活動を強いられており、直接に転覆的かつ反資本主義的次元のただなかで、おのれの社会性を発展させるからである。

最終的に、この分離は完全に根拠を失うようになっている。それは、社会的労働の精神的な性格が議題になりはじめることだ。そこでは個々の知的化されたオペレーターが具体的な知識の担い手となり、生産サイクルの全体性を横断する社会の知的体系についての理解をますます深めていくようになるのだ——当然ながら、苦痛をともなったものであり、ねじれてもいるし、断片的なものでもある。

2 テクノロジーと一次元的思考

ヘルベルト・マルクーゼ¹¹も当時、思考形態と社会的生産のあいだの関係について検討していた。生産の圏域でみられるテクノロジーをめぐる目的論は、その認識論的構造の見地からこそ、思考のプロセスを最終的に奴隷化するに至るといふ。

操作主義(operationalism)——概念をそれに対応する一連の操作と同義であるとする——の特徴は、「事物の名前を同時にその機能の仕方も指示するものとみなし、性質や過程の名前を、それらを発見あるいは産出するのに用いられた装置を象徴するものとする」と言語学的傾向にも表れてくる。¹²

マルクーゼは、こうした観点からさらに「テクノロジーな合理性の全体主義的な世界は、理性の観念の変質の最新形態である¹³」とも述べる。理性という観念のこうした全体主義的方向へのねじれは、人間のパースペクティブを2つの方向に閉ざしてしまうよう作用する。ひとつは、理性をその操作的かつ機能的形態へと一次元的に還元することで、社会の思考やイマジネーションの可能性を単一的次元へと縮減する方向である。もうひとつは、テクノロジーそれ自体が平板化して、もはや社会の側からの実験や創造性に対するオープンな領域ではなく、ただ唯一可能な発展

10 【日本語・訳注】大衆労働者 (mass worker) とは、フランコ・ベラルディ (ピフォ) も影響を受けてきたイタリアのオペライズモ (労働者主義) という「異端派マルクス主義」の知的・政治的潮流において、1960年代に、既存の労組や政党からもっとも自律し、かつもっとも戦闘的な主体になりうると考えられた非熟練の主に男性工場労働者たちのことを指す。

11 【日本語・訳注】ヘルベルト・マルクーゼ (Herbert Marcuse) 1898 生まれ、1979 年没。思想家。ドイツ生まれのユダヤ人であり、1934年に米国へ亡命、後に帰化。訳書に、『初期マルクス研究——『経済学=哲学手稿』における疎外論』(良知力+池田優三訳、未来社、1961年(改訂版1968年、新装版2000年))、『ユートピアの終焉——過剰・抑圧・暴力』(清水多吉訳、合同出版、1968年(改訂版1973年、中央公論新社から2016年))など。

12 【英語版・注】Herbert Marcuse, *One Dimensional Man Studies in the Ideology of Advanced Industrial Societies* (Boston: Beacon Press, 1964), pp. 86-87. (英語翻訳者メモ: マルクーゼは、スタンリー・ガー (Stanley Gerr) の論文「言語と科学」(『科学哲学』誌、1942年4月、p. 156) を引用している。)(ヘルベルト・マルクーゼ (生松敬三+三沢謙一訳)『一次元的人間——先進産業社会におけるイデオロギーの研究』河出書房新社、1980年、106頁、一部訳文変更。)

13 【英語版・注】Marcuse 1964 (123). (1980年、144頁、一部訳文変更。)

の次元、すなわち資本主義的發展という次元——利潤を基盤にする経済という限定的な機能性に従属してきた次元——しか持たない活動へと生成する方向である。

マルクーゼは、イタリアでは同時期に出版された『エロスと文明』(原著 1955 年、イタリア語版 1964 年)という別の著書でも、テクノロジーの解放的な¹⁴潜勢性について議論を展開しているが、機能主義がこうした¹⁴潜勢性をいかに縮減するものであるかを告発しているのは、やはり『一次元的人間』である。マルクーゼは、自己実現的な理性の弁証法を、機能主義的還元に対立させている。かれの視点は観念論的なものにとどまっているし、その思想には社会が再構成される具体的なプロセスについてはいかなる言及もみられない。それでも、マルクーゼは、後期資本主義の発展についてある本質的特徴をつかみとっているのだ。

弁証法的思惟は「である」と「すべきである」のあいだの¹⁴危機的緊張を、まず存在そのものの構造に固有なひとつの存在論的な事象として理解する。しかしながら、この存在の状態の認識——その理論——は、最初から、具体的な¹⁴実践を志向するのだ。真理に照らしてみると、真理が所与の事実のなかで偽造され、否定されて現れるために、所与の事実自体が偽りであり、否定であることが判明する。

それゆえ、思惟はその対象の状況に導かれて、対象の真理を、もうひとつの論理の諸概念によって、もうひとつの言説の世界のそれによって判断するようになる。¹⁵

マルクーゼの著書は、テクノロジーの使用を通じて、ロゴスと生産とが完全に一体となっていく傾向を描写している。この傾向のたどり着く先が、世界のデジタル化にほかならない。デジタル化とは、ヘーゲル流の汎論理主義を、弁証法的ではない、脱潜勢化されて対立なきものへと変形し、逆説的な¹⁵かたちで実現するものなのだ。

技術的進歩のたえまないダイナミズムには政治的内容が浸透してしまった。そして技術のロゴスは持続的な隷属のロゴスに作り変えられてしまった。テクノロジーの解放的な力——事物の道具化——は解放の足かせに変わり、人間の道具化となる。¹⁶

生産過程において、さらには生産過程を論理機械の内側へと転移させるさいに用いられるアルゴリズムによって、ある種の合理性がその操作的形態において具現化される。しかし、このようにして世界は(ヘーゲルを反転させながら)その論理的-デジタル的還元のもとに包摂され、それによって、技術的理性へと組み込まれた資本主義的形態のなかに恒久的にはまりこみ抜け出せなくなってしまうのだ。「テクノロジーは物象化の巨大な媒体となっている——それはもっとも成

14 【日本語・訳注】この箇所は、英語版では、dialecticつまり「弁証法」であるが、日本語訳書(生松敬三+三沢謙一訳)では「危機的緊張」となっていた。『一次元的人間』のある英語版(*One-Dimensional Man: Studies in the Ideology of Advanced Industrial Society*. Taylor & Francis, 2013)をみたところ、critical tensionとなっていた。ゆえに、ここでは「危機的緊張」としている。

15 【英語版・注】Marcuse 1964 (133). [1980年、153-154頁、一部訳文変更。]

16 【英語版・注】Marcuse 1964 (159). [1980年、179頁、一部訳文変更。]

熟し、もっとも有効な形態をとった物象化なのである」¹⁷。

3 〈労働〉、〈行動〉、思考——エクソダスとネットワーク

パオロ・ヴィルノは、「名人芸と革命（エクソダス〔脱出〕の政治理論）」と題された見事な論文で、もっとも根本を問うような視座に立って、労働の問題を提出する。そうすることで、〈労働〉と〈行動〉とのあいだをどう区別するかという問題に直接的に取り組んでいる¹⁹。マルクスは『資本論』のはじめの部分で、〈労働〉と〈行動〉にこのような区分を設けている。しかしこんにちでは、こうした区別を行なうことが難しくなっている。ヴィルノによれば、〈労働〉がさまざまな変容を遂げてきたことで消去されたり、ことによると、使い古されたりしてしまったのだ。「〈行動〉が何を意味するか、という問いほどこんにち不可解なものはないようにみえる」²⁰。

〈行動〉はいかに定義できるのか、とヴィルノは問いかける。そして、2つの領域にしたがって、回答する。「ひとつは、労働、その寡黙で道具的な特徴、そしてその反復的で予想可能なプロセスを成り立たせるオートマティズムと関係する。もうひとつは、純粹な思惟、その孤独で人目につかない特質と関係している」²¹。

だが、〈行動〉の場が〈労働〉の場と重なり合い、〈労働〉が知的活動と重なり合うこんにちでは、この2つの領域は混乱状態にある。「〈労働〉は政治的〈行動〉に顕著だった特徴を吸収している。こうした融合は、近代的な生産形態と公共のものへと生成してきた知性との交わりによって可能

17 【英語版・注】 Marcuse 1964 (159). (1980年、188頁、一部訳文変更。)

18 【日本語・訳注】 パオロ・ヴィルノ (Paolo Virno) 1952年生まれ。イタリアの思想家。現在、ローマ第三大学教員。訳書に『マルチチュードの文法——現代的な生活形式を理解するために』(廣瀬純訳、月曜社、2004年)、『ポストフォーディズムの資本主義——社会科学と「ヒューマン・ネイチャー」』(柱本元彦訳、人文書院、2008年)。

19 【日本語・訳注】 このヴィルノの議論は、ハンナ・アーレントによる労働、仕事、活動の区別をふまえたものである。アーレントの『人間の条件』(志水速雄訳)では action は「活動」と訳され、activity は「活動力」と訳されている。しかし、本稿における用語の使用法をふまえて、ヴィルノの『マルチチュードの文法』の訳者である廣瀬純にならい、ここでは action を「〈行動〉」、activity を「活動」と訳出している。『マルチチュードの文法』では、ここでピフォが参照している論文「名人芸と革命(エクソダス〔脱出〕の政治理論)」と同様の議論が展開されている。また、アーレントにおいては、work は「仕事」と訳され、labor が「労働」として訳されて区別されるが、ここでも議論の内容から、work を「〈労働〉」として訳出している。ヴィルノは、イタリア語でいう opera つまり work と、イタリア語の lavoro つまり labor に、概念的差異があると考えていないという。パオロ・ヴィルノ (廣瀬純訳)『マルチチュードの文法』月曜社、2004年、79頁の訳注参照。

20 【英語版・注】 Paolo Virno, "Virtuosity and Revolution," translated by Ed Emery. 以下のウェブサイトで見られる。www.makeworlds.org/node/view/34 (2004年5月1日)。ピフォはイタリア語のテキストから引用をしている。イタリア語テキストは、最初に『コモン・プレイス (Luogo Comune)』誌上に公表され、それからヴィルノの単著『世界性 (Mondanità)』(Roma: manifestolibri, 1994) に所収された。英語訳者は、Emery による翻訳を若干修正している。(英語訳者メモ)

21 【英語版・注】 Virno 2004 (2).

となっている」²²。

その一方で、〈労働〉と政治的活動のあいだの区別も失われているのである——ヴィルノが指摘するように、それは政治の官僚主義化の高まり（ずっと以前からみられる）のせいのみならず、（もっとも重要なことであるが）ポストフォード主義の労働過程の本質が、情報の精緻化と伝達、他人との関係をコミュニケーションを通じて動かすことであり、それゆえしまいには政治的活動でもあるからだ。ヴィルノが言うように、〈労働〉が〈行動〉と同化してしまうため、〈行動〉が望ましいものではなくなってきた一方で、精神的な性質を強める労働サイクルゆえに、〈労働〉の条件がより望ましくなっていることも認識する必要がある。こんにち、労働者のアイデンティティ形成を手助けするのは、コミュニケーション能力が生産過程に関与しているという事実、労働者の個性が〈行動〉する能力としてみなされているという事実なのである。

にもかかわらず、こうした事態が恐るべき窮乏化でもあるのもまた事実なのだ。というのも、ここで作動しているのは、人間に特異な属性が、いまや資本主義のパラダイムの規則となった経済の記号化に服従させられるという事態だからである。

資本主義のスローガン「^{トータル・クオリティ}総合的品质」は、従来、労働から締め出されていたすべての側面——すなわち、コミュニケーションをとる能力と〈行動〉に対する嗜好——を働かせようとする企て以外の何を意味するというのか？ あるひとつのテーマについてさまざまな場面で役割を演じさせる以外に、個々人の経験を全面的に生産過程へと包摂することがどうすれば可能というのか？ このような場面は、自己実現のパロディとして、服従の真の極みを体現している。他者との関係、あるいは自身の言語能力そのものが、賃労働に縮減されるのを目の当たりにする人ほど、かわいそうな人はいない。²³

「疎外」というカテゴリーは、産業化が労働者を自分自身の仕事（労働生産物）から切り離れた諸形式を説明するが、切断されてこそ自律性の可能性もあった。労働者が生産過程から距離をとって見る（対象化する）ことが、事実有意義で創造的な要因だったわけである。しかし、〔労働者と生産機械とが〕統合された生産サイクルの有機的－無機的連続体のただなかで、いまやそれは失われている。ジャン・ボードリヤール²⁴によれば、こうした状況は新たな問題を提起する。

わたしは人間なのか、それとも機械なのか？ 伝統的な機械との関係においては、あいまいさは存在しない。労働者は、つねになんらかのやりかたで、機械とは異質の存在となるのであり、それゆえ機械によって疎外される。人間として、労働者は自身の外在性というかけがえのない属性を保持し続けていた。ところが、新しいテクノロジー、イメージ、対話型の画面は、わたしとともに、集積回路を形成する。ビデオ、テレビ、コンピュータ、ネットワーク。これらは、コンタクトレンズや透明な人工器官のように、発生学的に身体の一

22 【英語版・注】 Virmo 2004 (2).

23 【英語版・注】 Virmo 2004 (4-5).

24 【日本語・訳注】ジャン・ボードリヤール (Jean Baudrillard) 1929年生まれ、2007年没。フランスの社会学者。訳書に『消費社会の神話と構造』(今村仁司+塚原史訳、紀伊國屋書店、1979年(普及版1995年、新装版2015年))、『シミュラクルとシミュレーション』(竹原あき子訳、法政大学出版局、1984年(新装版2008年))など多数。

部となるほどまで、身体に組み込まれているのだ。²⁵

人間の身体と精神^{マインド}が永久の感電回路にとられる。身体と精神は、いまや統合された情報循環の一部をなす。ヴィルノが支配的パラダイムに対して、自律的でありうる〈行動〉を呼びかける地平とは、エクソダス〔脱出〕である。つまり、資本主義的経済圏の一貫性ある滑らかな平面とは交差せず、その規則にしたがうことのない公共圏の構成である。。

政治的〈行動〉の手がかりは〔……〕労働の外部に、そして〈労働〉に対立して、知性の公共的性格を発展させることにある。〔……〕私がここでエクソダスという用語を用いるのは、国家からの大衆的離脱、一般的知性²⁶ (general intellect) と政治的〈行動〉との同盟、公共圏へと向かう知性の運動を定義するためである。²⁷

エクソダスは、経済学の論理とはもはや相互作用しないがゆえに独立した、その意味で平行なコミュニケーションの平面の構築を通して起こる。ヴィルノがエクソダスの比喻で指し示す傾向は、ユートピアに近い。ネットワーク (Net) の確立を通じて、この傾向が作動しているのを現に見て取れなくはない (ネットワークを、インターネットという唯一ではないが、そのもっともよく知られた形状の増殖に見出される接続型モデルとしてみなすのであれば)。²⁸

ネットワークの特徴とは何であろうか？ 第一に、ネットワークとは、コミュニケーション的行動がみずからの意味の平面を確立する場所である。コミュニケーションの契機に先立って世界は存在しない。たえず広がりゆく世界は存在しない。コミュニケーションのあらゆる中断は、ある特定の公共世界がオフになることを意味する。第二に、ネットワークとは、交換の中身——メッセージ、生産物、公共圏の事物——が、いかなる意味においても中心なるものを經由せずに、また、帰属なるものの領域を構成することなしに、ある地点から別の地点へと移動できる回路のこ

25 【英語版・注と日本語訳者からの訳注】英語版には、Jean Baudrillard, *Symbolic Exchange and Death*, trans. Iain Grant, intro by Mike Gane (London and Thousand Oaks, CA: Sage Publications, 1993) 51 とある。しかしながら、日本語訳書(今村仁司+塚原史訳)を確認したところ、該当箇所は見当たらなかった。ボードリヤールの『透き通った悪』(塚原史訳、紀伊國屋書店、1991年、81-82頁)に、類似の箇所があったので、この引用ではそれを参考している。

26 【日本語・訳注】一般的知性 (general intellect) は、マルクスの『経済学批判要綱』の「固定資本と社会の生産諸力の発展」、いわゆる「機械についての断章」において論じられている。これは資本主義が発展していくにつれて、機械に具現される科学的・技術的な知識、いわば固定資本に具現された抽象的知識が生産過程からの独立性を持ちはじめ、それ自体が生産力として生成する状況を指し示す。労働者は生産の行為主体としてよりも、生産過程のかたわらで、それを監視・調整する役割を引き受け、生産力としての役割を喪失していくと考えられた。しかし、イタリアのオペライズモの系譜に立つ知識人たちによれば、知識と生産の関係は、機械体系のなかだけの話ではなく、言語的協働をはじめ、人びとの社会的協働のただなかに現れると考えた。ちなみに、『経済学批判要綱』のこの部分が「機械についての断章」と呼ばれるのは、ピフォも多大な影響を受けたオペライズモの重要雑誌『赤の手帖 (Quaderni Rossi)』上に、このようなタイトルで翻訳されたからである。Karl Marx, Frammento sulle macchine, *Quaderni Rossi*, 4, 1963, pp. 289-300.

27 【英語版・注】Virno 2004 (7).

28 【英語版・注】英語訳者は、イタリア語の rete [ネットワークの意味] を “Net” と訳出しているが、これはインターネットやウェブにかんする初期の現実とより包括的となった現実の両方を言い表すためである。(英語訳者メモ)

とである。最後に、ネットワークでは、行為主体はアイデンティティ〔同一性〕を持たない、というよりも、ネットワークとは、アイデンティティと言表行為の流れが必ずしも合致することのない場所なのだ。

だいたいは無駄なデータを送ってくるスクリーンを眺めることで、われわれに時間を浪費させるインターネットの話は脇に置いておこう。私の関心は、インターネットではなく、ネットワーク、つまりそれが意味するパラダイム型モデルの議論にある。インターネットとは、かつてなく具体的で、興味を引きつけ、高速になるであろうコミュニケーションのあり方の実験室でしかない。インターネットは、さまざまな可能性と結びついた予見不可能な特徴を帯びていくことだろう。たとえば、テレビとつながり、臨場感を伝えるかもしれない。仮想現実とつながって、没入的経験世界を作り出すかもしれない。あるいはスーパーマーケットになるかもしれない。いずれにせよ、ネットワーク型モデルが、社会関係の新たなかたちを生み出すのを妨げることはない。だとしても、インターネットの現在の変革が明らかにするのは、ヴィルノが言うエクソダスが初めて具現化していることである。そして、それは不安を掻き立てるものでもある。

カナダのマルクス主義批評家アーサー・クローカー²⁹は、インターネットが情報ハイウェイ (infobahn) へと変容するうちに、〈仮想階級〉(virtual class) が形成されることを論じている。ネットワーク・ソフトウェアの開発に関わる巨大多国籍企業、電話会社、専門技術者が率いる国民国家による情報ハイウェイの構築は、惑星規模でコミュニケーションを行なう生きた身体に対して、統計上、平均的な閲覧経路をあらかじめ決定してしまう仕組みを導入している。同時に、〈仮想階級〉はおのれを隔離し、人類の大多数の社会生活からみずからの活動圏域を切り離してもいる。人類のほんの数パーセントが与圧室に閉じこもり、そこから自分たちと同族の2億人と接触することができる。その一方で、残りの60億人は、あらゆる知性、あらゆる公共的次元を剥奪された、具体的関係の悪夢のなかを溺れている。具体性を生きる人間は残滓となると同時に、意思決定プロセスのいっさいが、かれらにはアクセス不可能な回路へと取り込まれることとなる。「情報ハイウェイとは、情報通信網のアンチテーゼなのだ。それは、〈仮想階級〉が、おのれの生存のためにインターネットの公共的次元を破壊する必要に迫られているのと同じことだ」³⁰。自律的な公共圏の創設は、ここにおいて、そのもっとも意義深い特徴を失うことになる。

〔……〕いまや、サイバネティクスのグリッドは、しっかりとした管理統制下に置かれており、〈仮想階級〉はインターネットを抹殺しようと行動している。これは古いシナリオであり、今回は、仮想という形態で繰り返されている。マルクスは、この初回のシナリオを承知していた。あらゆるテクノロジーは、相反する可能性を解放と支配とに向けて解き放つのだ。³¹

29 【日本語・訳注】アーサー・クローカー (Arther Kroker) 1945年生まれ。カナダのヴィクトリア大学教員。訳書に『技術への意志とニヒリズムの文化——21世紀のハイデガー、ニーチェ、マルクス』(伊藤茂訳、NTT出版、2009年)、『ポストモダン・シーン——その権力と美学』(デイヴィッド・クックとの共著、大熊昭信訳、法政大学出版局、1993年)。

30 【英語版・注】 Arthur Kroker and Robert Weinsten, *Data Trash* (New York: St. Martin Press, 1994) 7.

31 【英語版・注】 Kroker and Weinsten 1994 (7-8).

クローカーとワインスタインが直観した³²きわめて重要なことは、データと意味との矛盾にこそある。ネットワークとは、たえず社会的意味を定義し直すことへ向けた集約的かつ双方向的な探求回路を体現するものである。反対に情報ハイウェイ^{インフォバーン}は、データの流通速度を遅らせるという理由で、意味を排除するシステムの根幹をなすのだ。

しかしながら、仮想空間内の活動^{サイバー・アクティビティ}とは、社会関係に対立するものである。人間の存在感は、ピクピク動く指、痙攣する身体、チャンネルをひたすらブラウズして回り、厳密にプログラム化された範囲＝限界のなかで選択を行なう過飽和状態の情報ポンプへと還元される。実際にケーブルソフトによって「インターフェース化」されたのは、脳というソフトマター〔柔らかい物質〕なのだ。〔……〕知識が情報に縮減されるとき、意識は、歴史、判断、経験との生きられた結びつきを篡奪される。ここからもたらされるのは、知識社会の拡大という幻想、仮想化された知識という現実である。それは、厳しく統制されたサイバネティック交換の媒介としての知識³³であって、そこにおいて思考は病気となる。その病気は、情報と呼ばれる。

したがって、『データ・トラッシュ (Data Trash)』(1994)の著者であるクローカーとワインスタインによれば、最初にインターネットとして出現した、一般化された仮想交換システムが、資本主義の疎外原理を完全に具現したシステムへと変貌するのは不可避なのである。資本主義の基礎には、累進的な抽象化という原理がある。人間活動は、生産物、そして知識、有用性、喜びとの関係を空っぽにされる。こうして、人間活動は交換価値を生産する労働になる。事実、交換価値とは、純然たる労働時間の結晶化であり、活動の具体的な質については根本的に無関心なものだからだ。記号の交換は、経済交換システム一般として機能するためには、意味を抽象化したもの、つまり単なるデータ送信にならなければならない。情報生産プロセスから引き出される記号は、意味のある内容を交換する機能からは切り離されている。相異なる地点間で行なわれる記号の交換には、余計な知識は少しも内包されるべきではない。それは、そのもっとも絶対的な抽象へと還元された交換価値の純然たるフロー、すなわち情報へと生成する必要があるのだ。情報が意味に完全に取って代わっている。しかし、情報が意味の圏域を空っぽにすれば、認知活動の抽象化——工業活動が実現した物質的生産の抽象化に続く——がさらに高まれば、社会への影響がないなどということはあるまい。クローカーとワインスタインがすでにその最初の症状を見て取る、奇妙な流行病が蔓延している理由はここにある。懐古型ファシズムという流行病である。

クローカーとワインスタインの社会学的想像力によるなら、懐古型ファシズムとは何であるか？それは、すべてのコミュニケーション的かつ社会的な交換形態のデジタル化によって、辱められ、周縁化されてきた身体の反動である。この反動は、発狂した攻撃的行動という様相を帯びている——発狂しているのは、知性なるものが、抽象的な情報生産機械のもとに完全に包摂され、吸収されているからだ。

32 【日本語・訳注】マイケル・A・ワインスタイン (Michael A. Weinstein) 1942年生まれ、2015年没。米国の政治学者。写真批評や音楽活動にも取り組んだ。訳書として、『行動科学派の政治理論』(吉村正訳、東海大学出版会、1973年)。

33 【英語版・注】Kroker and Weinstein 1994 (23-24).

仮想資本主義は、恒久的に行動有機体を機能不全とし、永続的に安全がない状態に置いている。仮想資本主義が、そのたえまない転位を通じてインセキュリティを生み出すとき、³⁴（組み換え）^{リコンビナント} ファシズムは存在に対する憎悪を動員するようになる。

いっさいの意味を剥奪された存在^{イグジスタンス}は、単なるデータの再集合へと切り縮められる。存在は、再結合される抽象化機械によってこうした状況にさらされ、有機体に対する憎悪を刺激する。他者の存在に対する攻撃性は、実際には、存在一般に対立する、何よりもまずわれわれ自身に対立する反動なのである。

〔……〕資本主義は、まだ完全にテレマティクスのようにではなく、依然として労働、肉体ある購入物をそれなりに必要としている。滅びかけている労働——それ自体が生存への意志と、仮想性への意志の対立によって構成されている——と、資本主義の抽象化を増大させる意志——それ自体が仮想性への意志の中間形態——とを媒介するファシズムが登場する。³⁵

ここでわれわれは、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリが脱領土化と再領土化という相補的概念を通してすでに入念に仕上げていた問いに再び遭遇する。ドゥルーズとガタリの研究は、普遍史を脱領土化のプロセスとして定義する。資本主義は、この途切れを知らないプロセスのもっとも高次、かつもっとも暴力的な契機を体現している。資本主義は、歴史（個人、共同体、場所、活動の歴史）を消し去るものだからこそ、歴史の普遍的真理を構成するのだという。しかし、脱領土化とは何であるか？ それは、コード化された現実から脱コード化された現実への変転、認識可能なものから不透明なものへの変転である。脱領土化は、個人をそのなじみのもの、領土的・イデオロギ的・職業的素性から引き抜き、テクノロジーとコミュニケーションが加速させ、いまやデジタル化を通してそのスピードが最速に達している抽象的な交換過程へと投げ込んでいいる。資本はまさにその発展のはじまりから、脱領土化のプロセスを作動させていた。産業社会が実現されるにつれて、伝統はその力を失い、家族のつながりは弱まり、かつての儀式は、われわれが敬い、神聖なものとなしたあらゆる形式とともに姿を消してしまった。資本は、家族、宗教的信仰、共同の価値のような伝統的な制度を問いただし、後期近代の豊かさのただなかで、かつておのれの発展を可能としたはずの政治的・心理的障壁、つまりは国民的帰属^{ナショナルリティ}や言語、ついには労働そのものをいまや破壊している。資本はいま、デジタル化された情報の循環にこそ照準を絞っている。

しかし、資本がこの地点にまで達すると、かつて人間が家族、宗教、民族^{ネイション}、労働に見出していたアイデンティティに取って代わるようなものは何もなくなくなる。人間は帰属のない状態にいて、アイデンティティなしに生きることに文化的に慣れているわけではない。クローカーとワインスタインが言う懐古型^{レトロ}ファシズムとは、仮想段階に達した資本主義によって引き起こされた空虚感に対する反動にほかならない。資本が完全にアイデンティティへと向かう動きに反するに至るときに、宗教的原理主義、ナショナリズム、ポピュリズムなどの、懐古的で伝統的、そして近代初期的なアイデンティティ追求プロセスが解き放たれる理由はまさにここにある。

34 【英語版・注】Kroker and Weinstein 1994 (65).

35 【英語版・注】Kroker and Weinstein 1994 (89).

デジタル化のプロセスの結果、身体には残余的な機能だけが残されることで、絶望的な反乱が引き起こされる。それはあらゆる形式の伝統主義への固執、アイデンティティ主義的な記憶への執着、ついには攻撃的行動として表出するのである。欲望する身体は、消し去されたり、取り去られたり、また単なる残滓へと還元されることには耐えられないのだ。

これが懐古型^{レトロ}ファシズムを誘発するものなのである。締め出されていた身体が再度の姿を見せるとき、それは攻撃的かつ自己破壊的となる。このようにしかならないのは、社会的なものの仮想化が、重大な選択——身体的な社交性を得ない圏域でなされる——に影響をおよぼしうる可能性のいっさいを〔その身体から〕剥ぎ取っているからだ。だから、残滓へと切り縮められた大衆は、古めかしい理想、無分別な対立の名のもとで互いに分裂し合うのである。もはやいかなる具体的な知性も流通してはいない。仮想回路にすべてが吸収されてしまった。ここにこそ、人間の行動が狂気じみていくようにみえる理由がある。

4 認知労働と情報生産^{インフォ・プロダクション}

20世紀の労働運動の基本的な政治的問題とは、権力を奪取し、社会主義を建設することだった。この2つの目標は、社会闘争の生産力や創造性を組織的に屈折させてしまった。屈折させたのみならず、実際にはその力をみずから対立するかたちで用いた。こんにちでは、このような方向性は消失した。社会－権威主義的体制の崩壊とともに、「社会主義」という言葉がすべての意味を失ったからというだけではない。生産的労働の新たな社会的・技術的^{コンポジション}構成が、政府＝統治や組織化にかかわるあらゆる議論の条件を根本的に変えているからでもある。

われわれが生産過程の精神的な性質について語る時、それは政府＝統治によって生産過程に割り当てられていたはずの機能が、生産過程に包摂され、その内部へと取り込まれていることを意味する。もはや社会的労働のプロセスと、社会のガバナンス一般とのあいだにはいかなる区別もない。もちろん、政治的意思決定や政治的代表制というフィクションは残存している。しかし、政治的意思の側から社会的プロセスを統治する実際の能力は、きわめて周縁的な役割しか果たすことはない。テクノロジーと金融の圏域において、あるいはテクノロジー、金融、社会、言語、^{イマジナリー}想像領域とを接続するインターフェースの創設において生じる基本的問題について決定するのは、(代表、決定、承認といったそのあらゆる複雑な機構を備えた)政治ではない。情報を、技術－社会的オートマティズムが作動させるプロセスのアルゴリズムとして十全な意味で考えるなら、政府＝統治は、情報循環のなかに統合されていることになる。プログラミングとは、人間労働のシーケンスの分析を行なって、それを単純化、組織化、機械化することを可能とするソフトウェアの精緻化として理解できる。政府＝統治を決定と規制の役割を担うものとみなすなら、プログラミングは統治行為＝政府の行動の核心に位置するのである。

綿密な技術－社会的設計、つまりソフトウェア開発の精緻化のプロセスのなかにこそ、政治的代表制やイデオロギーの舞台からは完全に姿を消したオルタナティブの輪郭が形成されている。プログラマーが実現化するユーザーインターフェースに照らせば、テクノロジーは管理統制の要素としても機能しうるし、労働からの解放をもたらす動因としても機能しうる。政治的問題は、精神労働者、とりわけプログラマーの活動のなかに完全に吸収されてしまった。オルタナティブの問題、つまりある種の活動を異なった仕方^で社会的に使用するという問題は、こうした人びとの活動の形態それ自体からもはや切り離すことはできないのだ。

機械工場、組み立てラインで労働する人間は、政治的変革へ向けた条件をあらためて認識し、抑圧を生む政治とテクノロジーのあり方を転覆したいなら、おのれを労働現場から切り離さなければならない。それゆえに、プロト工業化時代のあいだは、工場の外部、労働者の仕事用の知識の外部に政治的組織を確立することが必要とされた。しかし、労働が調整、発明、理解、プログラミングの活動へと生成するとき、これはもうあてはまらない。精神労働の時代においては、組織化と政治的行動をめぐる問題は、もはや生産的オペレーションのパラダイムにかかわる問題と分離不可能なのだ。

ソフトウェア・プログラミングは、従属労働とクリエイティブな活動との密接な関係を明らかにする。この場合なら、プログラマーの精神労働が価値増殖という生産的役割のみならず、そのオペレーションのありようにおいて政治的な変革機能をも獲得している事態が眼前にある。この2つの機能は、プロジェクトの方向性の違いゆえ意識の圏域では区別できるものの、オペレーション上は同一の平面に存在する。社会的労働の精神的な性質が高まることで、政治は社会的生産に内在化された機能に取って代われ、知識のオルタナティブな使用法のあいだで具体的かつ決定的な選択を行なうこと、そして具体化した情報と社会的使用のあいだ、認知アーキテクチャとコミュニケーションの生態学のあいだにインターフェースを発明することへと生成していく。当然ながら、これは、かつてないほど過剰となりゆく儀式めいた行ないを、政治が継続することを妨げるものではない。しかし、こうした儀式の効果はもはや失われている。その影響がおよぶのは、政治みずからのうちだけである。けれども、政治がこうした事態を経験しているのだとすれば、経済学——一学問分野としても、人間活動を定義する一領域としても——についてはどうか？ 経済という圏域の決定要因が安定性を欠いた非物質的なものへと生成し、概念化の体系としての経済学の核心にある定量化のルールを免れているときに、経済学は果たして科学であり続けるのだろうか？

新古典派経済学も、ケインズ経済学も、ポストケインズ経済学も、経済を、いくつかの変数が全体を動かすモデルとしてとらえている。しかし、こんにち必要とされているモデルは、経済をひとつの生態系、環境、形態としてとらえるものでなければならない。しかもそれは、個人および企業とくにグローバル企業のミクロ経済、政府のマクロ経済、さらにはグローバル経済という、3つの相互に影響し合う「領域」からなるものでなければならない。だが、これまでの経済学は、これらの領域のうち、ひとつを支配的な存在として位置づけ、他は従属的な存在であり、関数にすぎないものと仮定してきた。〔……〕しかし、こんにちの経済の現実には、3つの経済からなっている。〔……〕いずれも、他を完全に支配することはない。逆に、いずれも他によって完全に支配されることもない。しかし、ひとつとして、他から完全に独立していることもない。

しかし、経済学が有効であるためには、この複雑さを単純化する新しい総合理論が必要である。もちろん、まだそのような経済学の現れる兆しはない。だが、もしそのような新しい経済学が現れない場合には、ついに経済学不在の時代がくることになる。³⁶

36 【英語版・注】Peter Drucker, *The New Realities* (New York: Harper and Row, 1989) 156-157. [ピーター・F・ドラッカー (上田惇生+佐々木実智男訳) 『新しい現実——政府と政治、経済とビジネス、社会および世界観にいま何が起きているか』ダイヤモンド社、1989年〔2004年に新訳〕、226-227頁、一部訳文変更。]

経済学が科学として成立したのは、資本主義の拡大にともない、もろもろの規則が、生産活動と交換の一般原理として確立されたときだった。しかし、こうした規則を機能させるとなれば、土台となる生産的行為を定量化できなければならない。マルクスが説明した単位としての時間は、近代経済学の要をなした。商品生産に必要な時間を定量化する能力が、経済的諸関係のありよう全体の調整を可能とするわけである。しかし、グローバルな生産サイクルの主要要素が、予見不可能な精神の労働、言語の労働となり、自己増殖する情報が一般の商品となる³⁷とき、交換と諸関係の全体を経済的規則へと還元することはもはや不可能となる。

先進国経済のような複雑なシステムにおいては、統計的に有意でない事象、取るに足りない事象が、少なくとも短期的には、決定的な要因となりうる。そしてそれらの事象は、その本質からして、予測することも、防止することも不可能である。しかも、重大な影響をもたらした後においてさえ、その因果関係を明らかにできるとは限らない³⁷。

経済学が、現在進行する移行を理解できるようには思われない。経済学は、工業生産、つまり機械物質の身体的操作の把握と調整を可能とする、定量的かつ機械論的パラダイムの上に確立されているからである。定量的な測定と定数の反復への還元が容易にはできない活動、すなわち精神的活動にもとづいた非物質的生産の過程を説明し、調整することはできないのである。

情報通信技術 (ICT) が先進国の社会的・経済的な仕組みを混乱させている。従来のマクロ経済学で用いられる目下の指標は、時代遅れとなってしまう、ほとんど意味をなさない。さらに、これまでの経済学自体の位置づけと役割が問いただされている。雇用創出なき成長という現象が、一連の概念の価値を低下させているのである。

生産性という概念でさえ、この新しい現実による挑戦には抵抗できないわけである。新しいテクノロジーにともない、生産コストの大部分は、実際には生産過程に先立つ研究費と設備費によるものとなっている。デジタル化され、オートメーション化された企業では、生産活動にかかわるもろもろのファクターの変動に、生産が左右されるようなことはしだいになくなっていこう。限界費用、限界利益といった新古典派経済学的計算の基盤は、その意味をほとんど失った。賃金・価格計算の従来の原理は崩れつつある³⁸。

ジャック・ロバンの分析から明らかとなるのは、経済学的カテゴリーでは、現在の真に重大なプロセスの大部分を説明できないということであり、その理由は、精神労働が工業労働者の労働のように定量化できないという事実³⁹に求められる。それゆえ、科学としても、日々の経済活動としての古典派経済学の基本原理としても、価値規定は偶然的なもの、定義不可能なものとなる。

37 【英語版・注】Drucker 1989 (166). (1989年、240-241頁、一部訳文変更。)

38 【英語版・注】Jacques Robin, *Changer d'ère* (Paris: Seuil, 1989) 39.

39 【日本語・訳注】ジャック・ロバン (Jacques Robin) 1919年生まれ、2007年没。1960-70年代社会党に合流する「72の目標 (Objectif 72)」と呼ばれる運動に参加。その後、学問を横断的につなげる場を組織することに尽力した。2003年に編纂者の一人として加わった著作のタイトルは『経済主義からの脱却——新自由主義的資本主義への対案』(*Sortir de l'économisme: une alternative au capitalisme néolibéral*, sous la dir. de Philippe Merlant, René Passet et Jacques Robin, Paris: Éditions de l'Atelier, 2003.)。

ジャン・ボードリヤールは、『象徴交換と死』のなかで、次のように記している。

現実原則は価値法則の特定の段階と合致していた。こんにちでは、すべてのシステムは不確かさのなかで動揺しており、現実なるものはコードとシミュレーションというハイパーリアリティ^{リアリティ}に吸収されてしまう。いまやシミュレーション原則が、古い現実原則に代わってわれわれを支配する。合目的性は消え去り、モデルがわれわれを産みだす。〔……〕資本はもはや経済学の領域には属さない。資本は経済学をシミュレーション・モデルとして利用するからである。⁴⁰

生産のデジタル化にともなって、資本による抽象化は質的な飛躍を遂げている。生産は価値の抽象的生産であるにとどまらず、経済指標が生産システムから自律的となり、現実世界から独立した共時的かつ構造的、自己言及的かつ自律的なシステムとして構成されているのだ。こんにちの経済における金融的性格の高まりとは、まさにこれである。株式市場とは、強迫観念、心理的期待、恐怖、遊び、終末論的イデオロギーがゲームのルールとなる場所なのである。

リアリスト^{リアリスト}現実にもとづく経済活動は、その目的、具体的な必要を満たすために使用価値を生産するという素朴な目的、あるいは投下資本を価値増殖させるという巧妙な目的をゴールとして規定されていた。いまでは対照的に、目的にもとづいて経済活動を説明することは不可能だ。個人ないしは集団の目的であろうと、社会全体の目標であろうと、それは変わらない。経済は目的ではなく、ひとつのコードによって支配されている。

つまり、ここでは合目的性が、コードに書きこまれて、あらかじめ存在しているのである。だから、事態は少しも変わっていないことがわかる——さまざまな目的のつくりだす秩序が分子の作用に取って代われ、記号内容の秩序が（不確実なやり方で互いに置き換えられる）微細な記号表現の作用に席を譲っただけのことだ。⁴¹

ゆえに、経済はハイパー現実^{リアリティ}として現出する。現実の生産という視座からすれば、これは〔他に〕移し替えることはできない見せかけの、替え物の、^{ダブル}人工的な世界だ。

こんにちの経済の精神的な性質は、テクノロジーによる生産過程の変革によってのみならず、全世界を構成するプロセスの解釈を担うグローバル・コードによっても示されている。それゆえに、経済学という科学は、人類の生産活動を支配する基本力学を説明することも、その危機について説明することもできなくなる。経済学は、その特徴や研究領域が依然として未知である、グローバルな科学に取って代われなければならない。それは、記号－商品のグローバル・ネットワークとして理解された、サイバー空間の形成プロセスを研究することのできる科学となろう。

40 【英語版・注】 Jean Baudrillard, *Symbolic Exchange and Death*, trans. Iain Grant, intro by Mike Gane (London and Thousand Oaks, CA: Sage Publications, 1993) 2. (ジャン・ボードリヤール (今村仁司+塚原史訳)『象徴交換と死』筑摩書房、1992年、13-14頁、一部訳文変更。)

41 【英語版・注】 Baudrillard (59). (1992年、141頁、一部訳文変更。)

ピーター・ドラッカー⁴²は、米国・カリフォルニアの雑誌『ワイアード (WIRED)』上に1993年に公表されたあるインタビューで、生産過程のデジタル化のために、経済学的カテゴリーが十分なものではなくなっていることを主題として取り上げ、あらためて議論している。

国際経済理論は時代遅れだ。「土地」「労働」そして「資本」という伝統的な生産要素は、原動力というよりもむしろ束縛となっており、「知識」こそが非常に重要な生産要素のひとつとなりつつある。生産要素としての知識は2つの姿をとる。ひとつは既存の生産過程やサービスおよび製品に運用される知識としての「生産性」であり、もうひとつは新たなものに適用される知識としての「イノベーション」である。〔……〕知識はすでに、国境を越えた基幹をなす主要な資源となっている。そのために今世紀でもっとも顕著で前例のない社会現象が起きている。歴史上、ブルーカラーの労働者ほど急速に出現した階級はなかったし、またこれほど急速に没落した階級もいなかった。ブルーカラーの出現と没落はわずか100年のあいだに起こっている。⁴³

さらにドラッカーは、流通する商品が情報となり、市場が情報圏となる時代においては、知的所有という概念——古典派経済学と資本主義システムの基礎にある法的概念——は、あらゆる意味を失っていると指摘する。

われわれは印刷された言葉に焦点を当てていた、知的所有という概念全体を考え直さなければならぬ。おそらく、20、30年たたずに、電子的な伝送と印刷された言葉の違いはなくなってしまっているだろう。唯一の解決策は、全世界的なライセンス供与システムかもしれない。そこではまず前提として誰もが介入者となり、そのうえで出版されるすべてのものが再生産されることが当然とみなされるようになる。言い換えれば、誰にでも知られたくなかったら、それについて話すなどということだ。⁴⁴

知的労働の生産物について言うなら、情報が複製可能となる時代においては、所有システムはもう機能することができない。

一般化された解釈コードとしての経済学が廃れてきたありようをめぐるこうした考察の結論を述

42 【日本語・訳注】ピーター・フェーディナンド・ドラッカー (Peter Ferdinand Drucker) 1909年生まれ、2005年没。ウィーン出身。自身が公表した論文内容のため、ナチスの圧政から逃れてイギリスや米国へ。経営学者。「マネジメントの発明者」。訳書に、『ポスト資本主義社会——21世紀の組織と人間はどう変わるか』(上田惇生+佐々木実智男+田代正美訳、ダイヤモンド社、1993年(2007年))、『ネクスト・ソサエティ——歴史が見たことのない未来がはじまる』(上田惇生訳、ダイヤモンド社、2002年)など多数。

43 【英語版・注】Peter Drucker in “Post-Capitalist,” an interview by Peter Schwarz published in *Wired*, July-August 1993. 現在、以下のウェブサイトで見ることができる。www.wired.com/wired/archive/1.03/drucker_pr.html [ピーター・ドラッカー、ピーター・シュワルツ (荻野美喜子訳)「ポスト・キャピタリスト——ポスト資本主義社会の富は「知識」である」『WIRED (ワイアード)』第1巻第3号、1995年、78頁、一部訳文変更。]

44 【英語版・注】Ibid. [1995年、84頁、一部訳文変更。]

べるにあたり、アンドレ・ゴルツ⁴⁵の著書から引用をしたい。ゴルツは、『労働のメタモルフォーズ』のなかでこう記している。

貨幣による調整は〔……〕他律的調整であり、「実体験された世界の^{シンボル}象徴的再生産」が根を張っている「コミュニケーションの下部構造」を崩壊させる、というものだ。言い換えれば、身についた文化——知、嗜好、流儀、言語、慣行など——のおかげで、私たちは、明確で確実な、そして価値や規範が自明な世界にいるかのようにみずからを導くことができるのだが、それを伝えたり再生産する活動をすべて、貨幣や国家によって調整しようとすれば必ず、「実体験された世界の病理」、言い換えれば、その崩壊という代償を払わねばならなくなるということだ。⁴⁶

貨幣（すなわち経済学）と国家（すなわち政治（学））は、もはや生産の世界を支配することも、規律を与えることもできない。いまその中心にあるのは、頭脳を奪われた一団、つまりは、均一で定量可能な肉体労働の時間ではない。いま中心を占めるのは、精神の流れ、知性という空気のような物質にほかならないのだ。それはあらゆる測定の手を逃れるので、いかなる規則にもしたがわせることはできない。たいへんな病理を誘発し、認知と情動を文字通り発狂させるような麻痺を引き起こすことなしには。

45 【日本語・訳注】アンドレ・ゴルツ（André Gorz）1923年生まれ、2007年没。ウィーンで生まれ、スイスに亡命。1954年にフランスに帰化。思想家。訳書に『資本主義・社会主義・エコロジー』（杉村裕史訳、新評論社、1993年）、『また君に恋をした』（杉村裕史訳、水声社、2010年）など。

46 【英語版・注】André Gorz, *Métamorphoses du travail. Quête du sens, critique de la raison économique.* (Paris : Galilée, 1988) 132. [アンドレ・ゴルツ（真下俊樹訳）『労働のメタモルフォーズ——働くことの意味を求めて 経済的理性批判』緑風出版、1997年、288-289頁、一部訳文変更。]